

お試し版 仮面ライ
ダー剣 サンドリオン
ウォーリアーズ

伊勢村誠三

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ss書いてると他のssのアイデアばかり浮かんでくる事有りませんか？
止まらなくなつたのでその内連載したい奴の冒頭だけ公開します。

目次

お試し版 仮面ライダー剣 サンドリオ	
ンウオーリアーズ	1

お試し版 仮面ライダー剣 サンドリオンウォーリアーズ

遂にたどり着いた最終決戦。

ようやくここまで来たかという感慨深い感情と、

遂にここまで来てしまったかという緊張と、

数えきれない複雑な気持ちがこんがらがって熱になる。

心臓が早鳴り、今すぐにも目の前の狐の獣人の女と、

それに付き従うつい先週末までもに肩を並べて戦っていた猫の獣人の少女、キャルに飛びかかりたくなるが、

まだ堪える。

「たったの四人？他のお友達は？」

「お前の手下と遊んでるよ。」

俺は銀色の装置、ブレイバックルを。

明るいオレンジの髪の少女、ペコリーヌは剣を

俺の従者、という事らしい童女、コッコロは槍を

ここまで来ててもなお胡散臭い味方のような男、四条ハジメはチェンジマンティスのラウズカードを構える。

「余計なおしやべりは要らなそうね。」

「お前の不快な声はなるだけ聞きたくないからな。」

断末魔以外は！」

俺はブレイバツクルを装着。

ハジメもバツクル型の器官、

ジョーカーラウザーを出現させる。

「陛下。ブレイドは私が。」

キヤルも金と毒々しい紫のバツクルを取り出し、

同じく紫色のラウズカード、チェンジスパイダーのカードをセット。

「変身……ッ！」

〈OPEN UP ♣ A〉

よく見知った鎧がキヤルの身を包んだ。

金色と深い緑のアーマーに紫の複眼。

キヤルが生身で使う杖に酷似した醒杖レンゲルラウザーを構えた戦士は幾度となくアンデッドをけしかけ、自分とペコリーヌを抹殺せんと襲い掛かってきた仮面ライダー

「レンゲル……コッコロ、ハジメ、ペコリーヌ。

あの狐ババアは任せた。こいつは俺が！」

「了解です！」

「主人様、御武運を。」

「ああ。死ぬなよ、変身！」

〈CHANGE ♡A〉

醒弓カリスアローを携えたハジメ、仮面ライダーカリスを先頭に獣人の女に向かって行く三人。

俺は右腕を左斜めに真っ直ぐ伸ばし、

手首を掌が見えるように回転させ、

「変身！」
ヘッセン

〈TURN UP ♠A〉

仮面ライダーブレイドに変身した。

醒剣ブレイラウザーとレンゲルラウザーが火花を散らす！

「キヤル！お前は初めからそのつもりだったのか！」

「黙れ！」

〈STAB ♣2〉

「いいや黙らない！」

お前の声を聴くまで俺は黙らない！」

〈SLASH ◆2〉

双方の強化されたラウザーがお互いのアーマーを傷つける。

与えたダメージではレンゲルが上だったが、

先に立ち上がったのはブレイドだ。

「美食殿に入って！」

文句言いながらも俺たちの冒険に付き合ってくれたのは俺たちを殺すためか！」

「ああそうだよ！お前たちを殺すためさ！」

今頃気付いた!？」

〈BEAT ◆3〉

「いいやー！」

渾身の右ストレートを顔面に叩き込む！

もろに喰らった左側の仮面が崩れた。

「ずっと前から下手くそな尾行されてたりペコリーヌと話すとき時々苦しそうだったりしてのを見て！」

何かあるとは思ってた！

けど態々そんなことをして危機を知らせるぐらいには！

俺たちは仲間じゃ無かったのか！」

「仲間なんかじゃない！」

〈SCREW ♣?3 BLIZZERD ♣?6

BLIZZERD GAIL!〉

冷気を纏ったコークスクリューが俺の胸部アーマーに叩き込まれる！

「嫌いだ！お前たちが嫌いだ！」

ガキの癖に保護者ぶるコロ助が嫌いだ！

飄々としてるくせに傷つきやすいハジメが嫌いだ！

いつも好きな事を好きって素直に言えるペコリーヌが大嫌いだ！

空つぼの癖に！偽物の劣化コピーの力でいっちょ前にヒーローやってるお前が大嫌

いだ！

お前らなんか大っ嫌いだ！死ね！死んじやえ！」

「嘘だそんなこと！」

〈MAGNET ♠?8〉

磁力の力で無理やり引き寄せたレンゲルに連続斬りを浴びせる！

「じゃあなんでお前は泣いてるんだ！」

「ooooooooooooo!!」

その仮面の割れた部分からは血と、涙がこぼれていた。

「うるさいー!うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいー!」

私には、私には陛下だけだ!」

〈ABSORB QUEEN ♣?Q

FUSION JACK ♣?J〉

腕のラウズアブソーバーに二枚の上級アンデッドのカードがラウズされる。

レンゲルの両腕に大型草食獣を思わせるアーマーが追加され、胸部の♣のマークに雄叫びをあげる像のレリーフが刻印される。

ジャックフォーム。

ラウズアブソーバーもカテゴリーJもカードも持たないブレイドにはできない強化フォーム。

けど負けるつもりは毛頭ない。

「俺は、運命に勝つ。

たとえこの力が偽物でも、この身体が抜け殻でも!

この魂がただの残響だとしても!

今ここに確かにいる仮面ライダーブレイドを嘘にはしない!」

俺も三枚のカードをラウズし、最強の必殺技の準備に入る。
 キャルも同じだ。

〈K I C K ♣ ? 5 T H U N D E R ♠ ? 6 M A C H ♣ ? 9〉

〈R A S H ♣ ? 4 B L I Z Z E R D ♣ ? 6 P O I S O N ♣ ? 8〉

「ああ…あああああああ!!!」

「ウエー……ーイ!!!」

〈L I G H T N I N G ! S O N I C ! 〉

〈B L I Z Z E R D V E N O M ! 〉

地を走る雷となったブレイドはレンゲラウザーを構えたレンゲルの股をくぐって背
 後に回り、

レンゲルの振り向きざまに渾身のライダーキックを叩き込んだ!

「うわあああああ!!!」

派手に火花を散らしながら、カードをばら撒きながら転がるキャル。

再び変身しようとするが、それより先に俺はチェンジケルベロスのカードで13枚の

♣のカードを封印した。

「……ああ、そういえば持ってたわね。

ケルベロスのカード。あんたと一緒に倒したんだもんね。

あの3人の仮面ライダー。」

「つい先週の事なのにもう懐かしく思えるよな。」

なあキヤル。少なくとも俺は楽しかった。

覚えてるか？俺たちが会った時の事。

ブレイドは仮面を外して倒れたキヤルの横に腰を下ろすと

ぽつり、ぽつりと語りだした。

今までの冒険を、あの輝かしい日々を。